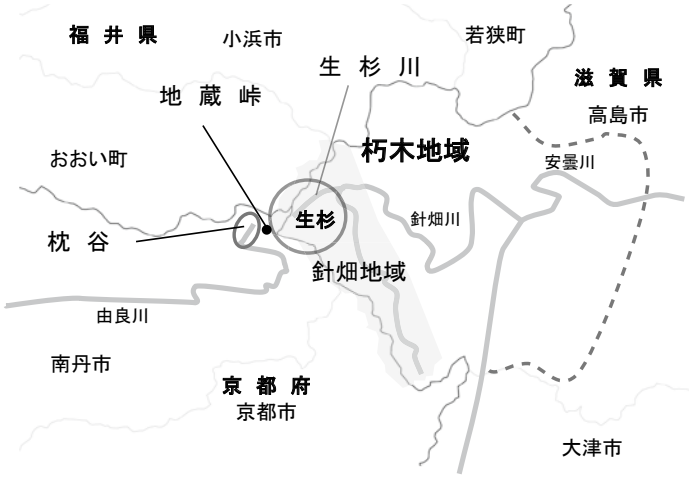
峠を越えた筏と魚の話

峠を越すための工夫

朽木西小学区の針畑地区は、15世紀以前は針畑荘と呼ばれ、京都の法成寺や比叡山延暦寺領として、材木を供出する杣が営まれていました。針畑地区最奥部の生杉集落の西方には、近江と山城の国境である地蔵峠（680m）があり、峠を下ったところの枕谷は、京都府北部を流れる由良川源流の一つとなっています。この辺は、江戸時代までは「中山のちまた山」と呼ばれて、針畑郷と知井郷（南丹市美山町）が共用する山林でした。

この中山で伐採されたスギなどの用木は、峠を越えて針畑川の支流生杉川の源流付近に運ばれて、筏に組まれて、生杉川を下りました。峠を越すにあたっては、驚くべき方法が用いられていました。枕谷と地蔵峠の落差（比高差）が25mほどであることから、通常は木の幹を輪切りにした小径の車輪をつけた「コロ車」と呼ばれる運搬車や人の肩が使われましたが、ときには小さな運河を掘って材木を流したり谷を堰き止めて材木を浮上させることで落差を少なくしたといわれています。過酷な労働に対して知恵を働かせて立ち向かった先人の努力がうかがわれます。



丹波の筏も峠を越えた

丹波山地には、中央分水嶺が存在し由良川が東から西へ流れて日本海へ注ぎ込み、保津川・桂川の上流となる大堰川が北から南へ流れて淀川と合流し、大阪湾に注ぎます。

材木の需要が多かった京の都へは、北山で伐採された材木が筏に組まれて大堰川を下り、嵐山へ運ばれました。一方、由良川水系では都の需要に応えるために、上流から流してきた筏を美山や山国付近で解体し、海老坂・深見峠・越木峠を人の背や牛馬の背で越して、大堰川支流の弓削川岸や田原川岸へ運んだのち、再び筏に組まれ都へ運ばれました。針畑と同様の手法が、丹波においても行われていたのです。

現在の地蔵峠のようす

峠を越えたイワナ

京都や福井の日本海側には、渓流魚のイワナは棲息していないといわれています。しかし、由良川の最上流域では、時々その姿を見ることがあります。昔針畑の人が移植したためだそうです。

峠を介して、地域間の交流があった証拠といえるでしょう。

問 文化財課 ☎（32）4467

編集雑感

夏真っ盛りの8月！皆さん夏を満喫してますか？わたしは寒いのが苦手なので、夏は得意です！

さて、最近仕事で写真を撮ることが多くなり、写真について少し考えてみました。写真で高島の魅力を伝えることのひとつは「見たことがないものを見せる」ことだと思います。それは「見たことがない風景」かもしれないし「普段から見ているものを、全くちがう角度から見てもらう」ことかもしれません。身近なところにも、いろんな「発見」があって、それを自分なりの「レシピ」で見てもらう。それが写真を撮ることのおもしろいところかなあと思っています。（Y）

広報たかしま 平成29年 8月号 No.211
発行▼高島市 編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R100 古紙パルプ配合率100%再生紙を使用。
VEGETABLE OIL INK